

「満洲」における心理学

—前半期における人物を中心として—

小谷野 邦 子

はじめに

かつて日本人が「満洲」と呼んでいた地があった。中国の東北地方をさして、もともとは満洲族が住んでいる土地という意味でそう呼ぶようになった。中国人は、その地を古くは東北三省、または東三省と呼んでおり、現在では東北地方、東北地区という名前を使っている。「満洲」「満洲国」という呼称は、ある時期の日本人の認識を反映しており、日本の植民地支配と深くかかわって使われてきたものである。ここではあくまでその歴史的事態を負った言葉として、「満洲」「満洲国」という呼称を使うこととする。

1932（昭和7）年に設立した「満洲国」の面積は、「現在の日本本土の約3.4倍、他の植民地との比較では、台湾の約36.2倍、朝鮮の約5.6倍という広大な」ものであり、またその人口からみると、敗戦時には「軍隊を除く在住一般日本人は、『満洲国』と『関東州』をあわせて約155万人、当時の日本国民約52.3人に1人」¹⁾にまでのぼったが、それでも「満洲国」「関東州」全体に占める人口比率は約2パーセント強にすぎない。ちなみに他の植民地在住日本人は、台湾が約35万人、朝鮮は約70万人であった。それだけでなく、「満洲」というと今日でこそ辺境の地のようにイメージされているが、位置的にそこは、ヨーロッパに開かれた国際的要地でもあった。当時日本からヨーロッパに行くには汽船で行くか「満洲」を経てシベリア経由で汽車で行くしかなかったが、汽車でいけば船で行く3分の1の日数と3分の1の経費でいくことができた²⁾のである。その広さと資源、国際的地理的位置、「満蒙は日本の生命線」といわれた所以である。戦前の日本を考えるうえで、「満洲」はきわめて重要な意味がある。

1905（明治38）年、日露戦争に日本が勝利し、その代償として、ロシアが清国から租借していた遼東半島南端の「関東州」とロシアが経営していた東清鉄道の一部を獲得した。それが、シベリア鉄道に結ぶ鉄道であり、その経営のためとしてつくられたのが南満洲鉄道株式会社（通称「満鉄」——以下満鉄と略記）であった。これによって、日本は満洲植民地化の有力な手がかりを得、以後多くの日本人が渡満していった。

このように日本の近現代を考える上で重要な位置にある「満洲」の、そこにおける心理学は日本の心理学を考える上でも重要性をもつ。その時期の「満洲」における心理学、つまり、一定の時代のその地を根として展開された日本の心理学（者）のはたした役割と意義を探るために、その第一歩として、今回はどのような人物がそこで活動したのか、またその所属していた機関の性格を明らかにすることにしばって報告することにする。

1. 「満洲」における心理学関係者

いつどのような分野でどのような人物が「満洲」で活躍したのか、まずは把握しておきたい。

心理学関係者が「満洲」に渡るのは、日露戦争後10年以上を経ってからであった。一般の日本人が家族を伴って「満洲」にひろく住むようになってはじめて、教育現場、その他官公署や企業等の職場に心理学徒が必要とされるようになってきたということであろう。その頃から、いわゆる「満洲事変」(1931年)までを第一期とし、1932(昭和7)年の「満洲国」建設後、独特の本格的な植民地化に進んだ、日中戦争突入(1937年)までを第二期、あからさまな軍国主義をしゃにむに押し進めて、「満洲」なる地が消滅した日本の敗戦(1945年)までを第三期と区分して見ていこう。この時期区分は「満洲」における日本の関わりの展開と関係すると同時に、当然のことながら日本におけるファシズムの進展の時期とも重なりあう³⁾。

ここで、心理学関係者としてとりあげるのは、この時期に「満洲」関連機関にその職業所属があって、1942(昭和17)年に設立された満洲心理学会の会員および主として心理学を専攻して大学等を卒業した人物や心理学関連の業績のある人とした。現時点でつかみ得た限りの氏名とその所属機関およびごく簡単な履歴を記したものが〈表1〉である。満洲心理学会会員については本人のアイデンティティが心理学にあると考えられる。しかし、研究業績が心理学に関連したものであるかどうかの評価には、異論もあるところであろう。また、心理学を専攻して大学等を卒業しても、その後の活躍分野がちがってきている人物をどう捉えるかについても問題がある。このリストでは名前を入れたが、前者の例には上村哲弥が、後者としては柿沼介、綾川武治などが考えられるところである。

第一期は福富一郎、朝日直樹、黒田源次等、「満洲」の心理学界を語るのには欠かせない人物がこの期に渡満していること、そして、それらの人たちがすべて満鉄関係機関に所属していることに気づく。また京都帝国大学出身者であることが目をひく。

第二期には、満鉄関係の南満洲工業専門学校や満鉄教育研究所に加えて、各地の高等女学校、師範学校、中学校等の教員、さらに、満洲国の設立にともなう満洲国官吏がはいってきている。したがって、帝国大学出に加えて、日本国内の師範学校や高等師範学校、文理科大学出身者がみえ、ひろがりを見せている。

第三期は、何とんでも建国大学の心理学者4人の存在とその人たちによる満洲心理学会の設立によって、国民学校や陸軍軍官学校の教員から、満洲国、各種地方官吏、さらに民間会社、満洲能率協会や満日文化協会等、それまで見えなかった分野にまで多様化してきている。この時期は、満鉄の経営の悪化によって満鉄関係の教育機関がかなりその権限を他に移譲したこと、および満鉄と関東軍との覇権争いが、満洲国の建国で決着をみたことを反映して、その所属機関の拡散がみられる。高等教育機関にしても、満鉄関連から、建国大学をはじめ、奉天工業大学、新京法政大学等、満洲国立の大学にその勢力分野が移ってきている。このように、心理学関係者の所属をみるだけでも、社会情勢の変遷を的確に映しだしている。また、一見してわかるように、心理学関係者のほとんどが、中等教育から高等教育さらに教育関係官公署など教育関係の分野で活動したといってい

表1 渡満期・所属機関別 主な「満洲」心理学関係者名簿⁴⁾

期	氏 名	主な最終学歴と在満期を中心とした職歴
第一期 19 31	柿沼 介*	1911 東京帝大心理卒 1919 満鉄大連図書館 1940 満洲国国立図書館寿備処嘱託 1943 満鉄大連図書館顧問 1945 ~ 1948 中国長春鉄路公司科学研究所中央図書館長
	上村 哲弥	1916 東京帝大政治卒 1919 満鉄に入る 1932 満洲国文教部学務司長、総務部審査役、同福 祉課長参与、歴任後退社 (1939 第一公論社創立)
	綾川 武治	1916 東京帝大心理卒 1919 同法科卒 満鉄入社 1923 満鉄東亜経済調査局退社 1934 旅順工科大学嘱託
	福富 一郎*	1918 京都帝大心理卒 1920 現在 満鉄教育研究所 その後京城師範学校兼京城医専 1932 現在 京城帝大 1933 ~ 1935 独に留学 1939 中央師道訓練所 同年建国大学教授
	朝日 直樹*	1916 京都帝大心理卒 1923 満洲教育専門学校 1931 ~ 1933 米英に留学 1933 満鉄教育研究所 1934 奉天鉄路総局人事課 1938 満鉄参事・奉天鉄路学院長
	大林恵美四郎*	1921 広島高師卒 1925 ~ 1928 満洲医科大学予科助教授 (薬学士) 1939 牡丹江青年学校
	黒田 源次*	1911 京都帝大心理卒 1914 同大学院修 1926 満洲医科大学生理学第一講座教授 1931 ~ 1934 ヨーロッパ留学 1939 満洲医大図書館長、医学陳列館長、予科主事、東亜医学 研究所長
第二期 32 36	佐藤 一	1927 東京帝大心理卒 同年満鉄社長室人事課 1931 満洲国監察院総務処庶務課長兼秘書課 長 同審計局事務官命官官房主事 1937 満洲合成燃料(株) 錦州工場労務課長 1939 同工場庶務課長
	綾 哲一	1932 広島文理大心理卒 同年南満洲工業専門学校
	石川七五三	1925 東京高師卒 1934 満鉄教育研究所 1939 現在 奉天朝日高等女学校
	津村竹一郎	1932 広島文理大心理卒 1933 同研究科修 1934 新京高等女学校
	平野 恵空*	1934 広島文理大心理卒 同年新京高等女学校 1942 現在 旅順女子師範
	富士川義彦*	1931 京都帝大心理卒 1935 現在 旅順高等女学校 1942 現在 旅順女子師範
	吉田 恒広	1934 広島文理大心理卒 同年旅順高等公学校
	立花 卓夫*	1933 広島文理大心理卒 1935 現在 大連弥生高等女学校 1942 現在 大連第三中学校
	安倍 三郎*	1929 東北帝大心理卒 1935 吉林高等師範学校 1939 建国大学教授
	松本 光庸	1935 東京帝大心理卒 同年満洲日報社編輯局 (新聞記者)
	須郷悦太郎*	1927 東北帝大心理卒 1936 師道高等学校教授 1942 現在 陸軍軍官学校
	高山 信司*	1929 東北帝大心理卒 1936 吉林省立長春兩級中学校 吉林女子師範、吉林省立第三国民高等 学校を経て、1941 師道高等学校教授 1942 師道大学
第三期 37 45	長谷川和美*	1931 京都帝大心理卒 1933 同大学院 1936 満洲医科大学予科教授
	阿部孫四郎	1936 京都帝大心理卒 1937 九州帝大大学院退学 同年満洲医科大学生理学教室助手 (1939 現 在 北海道岩見沢在住)
	川島 真一*	1937 東京帝大心理卒 1937 満洲国官吏 1939 現在 奉天省地方職員訓練所
	三村 晋一*	1919 三重師範卒 1938 齊々哈爾女子国民高等学校 1939 現在 中央師道訓練所
	大町 米蔵*	1922 広島高師卒 旅順師範学堂、哈爾濱兩級中学等を経て、1942 現在 四平師道学校
	江守 名彦*	1925 慶大経済卒 1939 満洲生命保険(株) 1942 現在 満洲能率協会幹事
	千葉 胤成*	1909 東京帝大心理卒 同大学院 1940 建国大学教授
	薄田 司*	1931 東北帝大心理卒 1934 同大学院修 1940 建国大学助教授
	坂田 一*	1935 京都帝大心理卒 1940 満洲国民生部参事官 のち文教部学務司 建国大学客員講師
	高島 忠雄*	1935 東京帝大心理卒 同大学院 1941 奉天工鉱山技術院教授 1942 奉天工業大学
	住 宏平	1941 東北帝大心理卒 1945 満洲製鉄本溪湖支社研究所
	その他の満洲心理学 会員1942年 現在の所属	熊谷謙太郎 (1935 九州帝大心理卒) ; 新京法政大学 武内睦哉 ; 満洲医科大学 宮島 清 (1913 京都帝大心理卒) ; 旅順工科大学 大槻春彦 ; 旅順高等学校 相馬紀公 (1938 東京帝大心理卒) ; 関東州廳官房文書課 根岸忠雄 ; 安東師道大学 橋本勝三・本多修郎・望月佐武郎 (1933 京都帝大心理卒) ; 陸軍軍官学校 尾形吉太 ; 旅順中学 町井貞次郎 ; 鞍山中学 康廣 浩 ; 春日在満国民学校 川本 隆 ; 平安在満国民学校 重国武雄・山地嘉吉・岸 義郎 ; 雪見在満国民学校 柴山安太郎 ; 鉄道研究所 高谷宣光 ; 文教部学務課 登丸福春 ; 吉林省公署 寺尾清吉・渡辺 正 ; 市立保健所 柳沢 昇 ; 満洲炭鉱会社 上山友二 ; 昭和鉄鋼所 和田壽夫 ; 満洲能率協会 和田浩一郎 ; 満日文化協会 内田辰次 ; 満洲映画協会 屈慶拔 ; 四平師道学校 王 崇岳 ; 協和会中央本部

(上記 氏名横の*印は満洲心理学会会員)

う。そこで次節で、まず「満洲」における教育事業についてとりあげる。

その所属機関を見ると、渡満時期の第一期から第二期のはじめにかけて、満鉄大連図書館、満鉄教育研究所、満洲教育専門学校、満洲医科大学、南満洲工業専門学校、等と並んでいる。先にも触れたように、これらはすべて満鉄の教育関係機関である。「満洲」における心理学徒の活動も、この満鉄の教育事業ときりはなしては考えられない。そこで次いで、満鉄の教育事業について、そして上記にあがった教育機関がどのような性格をもったものだったのか見ておきたい。

ところで、柿沼介と上村哲弥が渡満した1919（大正8）年という時期であるが、満鉄関係にとって、したがって植民地経営において或る意味をもった年代であった。戦前の「満洲」に君臨した植民地会社に、満鉄調査部という一大知的集団が創出されたことはよく知られている。昭和にはいると、そこに帝国大学出の秀才でも並大抵のものでは採用されなくなるのだが、その帝大卒が最初に入社したのが実にこの1919（大正8）年という年であるという⁵⁾。つまり、この頃から本格的にこの「知の集団」が形成されはじめたと考えてよい。その活動の基盤が充実した図書館の存在である。1907（明治40）年大連の満鉄調査部に図書室として設けられたのが最初であるが、1918（大正7）年の調査部の機構改革に伴って、その図書館が整備され、同年大連図書館が竣工し翌年開館の運びとなった。その初代館長になった島村孝三郎に、東京市立日比谷図書館にいた柿沼が引き抜かれたというわけである。心理学関係者が、満洲にその活動の場を展開しはじめたのは他の学問分野に比べて決して遅かったわけではない。

2. 「満洲」における教育事業

のちの建国大学教授福富一郎は、満鉄教育研究所講師として渡満し、「満洲」における当時の教育事業について論文⁶⁾を残している。それを中心に、主に1920（大正9）年時の「満洲」の教育事情を紹介していくことにする。

彼は、「満洲」における教育をその経営母体からみて、民国および民国人の経営するもの、欧米キリスト教会の経営するもの、日本および日本人の経営するものの三種類に分けて見ている。

民国および民国人経営の教育は、城内外、鎮、村、堡、屯などという地域分けの多くに「小学校」があり、やや人口の多い場所には、それより上級の、当時の日本の高等小学校および乙種程度の実業学校に相当する学校によって行われていた。また、県の城内には、中学校、女学校、甲種程度の実業学校が設けられ、吉林、奉天等省廳所在地には師範学校および高等専門学校が設置されていた。これらは中央政府の管轄下にあったが、それ以外に、各鎮、村、堡、屯に、書房といわれる私塾が教育を担っていた。

欧米人経営の教育事業は、すべてキリスト教系の学校だったという。長春、吉林、鐵嶺、奉天、蓋平、遼陽、海城、大石橋、安東などに初等程度の、奉天、遼陽、營口などに中等程度の、さらに奉天には高等程度のミッション・スクールが経営されていた。他に盲啞院が奉天に、養老院および孤兒院が遼陽に設けられていた。これらはその経営する病院とともに、「宗教に力を借りて」民国人にあたえる影響は根強いものがあったという。

日本および日本人の経営としては、さらに、(1) 関東廳の経営するもの、(2) 居留民の

経営するもの、(3) 東洋協会の経営するもの、および(4) 満鉄の経営するものの4種に区別される。関東州内の教育は主として関東廳の施設(いわゆる公立)であって、日本人の子どものためには、小学校、高等女学校、中学校を、民国人のために公学堂、公立普通学堂、および旅順師範学堂を、日中両国人のための高等専門教育として旅順工科学堂を経営している。

居留民団の経営になるものは1920(大正9)年時点では营口尋常小学校一校だけであった。満鉄がその経営を開始した1907(明治40)年の10月に居留民会を廃止するとともに、その経営していた小学教育の事業を継承してきていた。東洋協会経営というのは、大連における商業学校、旅順における語学校である。ある種の私立学校と考えられる。

経営を開始してから13年を経たこの時点で、満鉄は在留邦人のために小学校22、実業補習学校31、実科女学校10、中学校1、工業学校1、幼児運動場14をもち、中国人のために公学堂8、日語学堂3、実業学堂1を設けている。さらに日中両国人を共に収容する高等専門教育として南満医学堂がある。また社会教育に関わる施設として、簡易図書館18、巡回書庫貸付所14があげられる。そして、これらすべての教育事業一般の調査研究、教科書と教授参考書の編纂、および教員の養成と研究指導の機関として教育研究所が位置づけられていた。しかし、研究所の体制はいまだ整備されていなく、ほとんど現職教員の講習に手いっぱい状況であった。

これとは別に、研究教育団体としてはすでに、1909(明治42)年8月5日に設立された南満洲教育会(南満教育会)があった。関東庁長官を会長とし満鉄社長を顧問とするこの会は、教育行政に強力な発言力を持っていただけでなく、教育の内容や方法についても会員である教員を組織して多様な研究活動を展開していた⁷⁾。1912(大正11)年頃から機関誌「南満教育」を発刊し、「満洲」教育界に広く読まれていた。

その「南満教育」には心理学関係と思われる論文をみつけることができる。いくつか示すと、たとえば、教育学者畑中幸之輔⁸⁾は1914(大正3)年頃に連続して次のような論文を発表している。

「神経質の児童について(1),(2)」第38号、第39号 1914年2月、3月

「幼稚園に適用せられたるプロゼクト・メソッド」第40号 1914年4月

「プロゼクト・メソッド批判の規準」第41号 1914年6月

「プロゼクト・メソッドに関する問題二三」第42号 1914年7月

その他にも、知能検査関係の論文を発表している秋山真造⁹⁾のもの、京城帝大教授の松月秀雄のものなどが掲載されている。秋山には、

「知能検査に関する諸問題(1),(2)」第42号、43号 1924年7月、8月

「知能測定と教育上の民主主義(1)」第48号 1925年3月

が、また松月秀雄には、たとえば以下のようなものがある。

「智能測定の心理学的方法と智能列位法」第37号 1924年1月

「現代医学における心理学(1),(2)」第41号、42号 1924年6月、7月

「創造の心理(1)~(4)」第42号~第45号 1924年7月~11月

これらは、内地であっても発表されうるものであり、「満洲」在住の研究者だからこそできたというなんらかの特色があるというわけではない。

しかしこの頃からもう少し時代をくだると、日本本土から心理学関係者を招聘して開かれた南満洲教育会主宰の講演会や論文等に、時局を反映したものがみられるようになる。

たとえば、沢柳政太郎「日本人の位置」『南満教育』第54号 1925年11月

綾川武治「在満教育者の神聖使命」同第139号 1934年6月

田中寛一「将来の教育」同第140号 1934年7月

などである。

3. 満鉄の教育事業

満鉄はその資本の半分は日本政府出資の半官半民の会社である。1906（明治39）年の会社設立から第二次世界大戦における日本の敗戦まで存続し、日本最大の株式会社として、「満洲」の重要産業を押さえ、鉄道沿線に附属地という「領土」をもって、侵略と支配のための土台となった機関である。その事業には、大別すれば、鉄道業とそれに付随するホテルや倉庫の経営、鉄道附属地の経営、炭坑と製鉄所の経営、大連港の経営と海運業、理・工・農学の研究開発、経済政策の立案、各級の教育等があった。このように多くの権益をもつ機関は、政府の代行機関ともいふべき国策会社でなければならないという理由で、かなりの行政権があたえられていた。

満鉄の教育事業は、満鉄設立時に日本政府が出した「鉄道及付帯事業ノ用地内ニ於ケル土木・教育・衛生等ニ関シ必要ナル施設ヲ為スヘシ」（第五条）という「命令書」にもとづいて展開されている。ここでは附属地における土木建設、教育、衛生などの住民サービスをうたっている。特に初等教育の実施は、その「命令書」に則った鉄道附属地経営（支配）のための重要な事業のひとつであった。日本国内と同等同質の教育を施すことを目的としていた。これら主として初等教育とそれに従事する教育者のための教育研究を目的として奉天に設置されたのが教育研究所である。さらに満鉄独自の事業として、専門教育を施すことを中心とした中等・高等教育のための各種の学校経営がおこなわれた。また附属地の主要な都市には病院・医院や図書館などが設けられ、経営されていく。

中等教育は普通教育と専門教育に分けられるが、普通教育については、1919（大正8）年奉天中学校が設立されたのが最初で、これ以後中学校・女学校が増えていく。第二期以降に、普通教育としての中等教育機関にも心理学関係者の職域がひろがっていくわけである。他方中等専門教育については、中堅技術者の養成を目的として1912（明治45）年に満鉄が大連に設立したのが南満洲工業学校で、土木・建築・電気・機械・採鉱の5学科からなり、満鉄の事業そのものに直結している。高等教育機関として満鉄が最初に設けたのは、医師の養成を目的とした南満医学堂であった。1911（明治44）年、すでに開院していた満鉄奉天医院と連携するかたちで奉天医院の隣地に開設された。当時、中国全土にわたって医師が不足しており、医療の充実は支配・被支配の関係を越えて必要なことであった。その後、南満医学堂は、1922（大正11）年に満洲医科大学に改組され、満鉄が経営する唯一の大学となった。今日でも中国医科大学として中国有数の規模とレベルを誇っている。

その他の高等教育機関としては、1922（大正11）年に南満洲工業学校を改組してできた南満洲工業専門学校と、1924（大正13）年に開設された満洲教育専門学校がある。後者は

教育研究所と密接な関係をもっており、後に述べるように特色のある教員養成校であった。また南満洲工業学校が中堅技術者の養成に主眼をおいていたのに対し、南満洲工業専門学校は高級技術者の養成を目的としていた。

満鉄経営の教育機関は、1937（昭和12）年4月末現在の満鉄附属教育機関は、小学校128、幼稚園37、中等学校17、青年学校26、実業補習学校7、職業学校4、工業専門学校1、医科大学1、教育研究所1、「鮮」人普通学校19、「満」人初等学校28、「満」人中等学校1、日本語学校5を数えた。1920（大正9）年時（P.165を参照）に比べて、日本人のための学校数は80から221へ、中国人のための学校数は12から53に増え、そのうち小学校はなんと5.8倍強に増加した。しかし、満洲医科大学と南満洲工業専門学校その他一、二の特殊なものを除き、満鉄附属地行政権の移譲調整に伴い、1937（昭和12）年12月1日をもって「満洲国」もしくは在満日本官庁に移管されていった。

4. 満鉄教育研究所と石川七五三^{しめじ}

「はじめ満鉄には教員養成機関はなく、現職教育によって中国人教育担当教員を補充していた。……しかし、それだけでは不十分なために、内地の師範学校卒業生や現地の書房の中国人教員に多様の教育を施して中国人教育を担当させるようになった」¹⁰⁾。それが教育研究所のもとになる教員講習所である。1913（大正2）年4月に大連に開設された。中国に関する専門的な知識を教員がもつことの必要性を感じてつくられたものであり、幹部教員の養成を考えていた。さらに講習を受けた教員を軸にして「附属地」の教育の改善を図ろうとしたものである。教員講習所は、寄宿舎を備え、生徒には月々の手当て、入所旅費および修学旅行費が支給されるという好条件の上で、満鉄所属の日本人教員のなかから選抜して中国語、中国事情および日本語教授法などを講習する甲科と、同じく満鉄所属の中国人教員から選抜して日本語および各科教授法を講習する乙科があり、いずれも講習期間は1年間であった。1915（大正4）年4月にこの教員講習所の機構を改革して教育研究所と改称した。その後、日本人教育に従事する所属教員を対象とする小学校教育部講習と、「支那」人教育講習に二分し、それぞれ定員10から15人からなる短期（100日間）講習が加わったり、教員が各自の実際研究テーマをもって特定の講師の指導によって研究するコースや、研究所が計画した調査事業を沿線教員とともに推進するための予備的講習を行うようなコースを含め、講習は多様化していく。しかし必ずしも当初のねらいにたいして十分に機能したとはいえなかったようである。

1924（大正13）年9月満洲教育専門学校の設立にともなって、1926（大正15）年4月、教育研究所は教員養成の業務を同校に移してその附属教育研究所となり、在職教員の長期講習と教育に関する研究を担当するようになる。1933（昭和8）年満洲教育専門学校が廃校されたことにともなって、独立の研究所にもどり、1935（昭和10）年8月には教育参考館が付設され、1937（昭和12）年11月まで存続した。先にのべたように満鉄附属地行政権の移譲に伴い廃止されたのである。いうまでもなく、24年間あまりにわたって、満鉄附属地の教育現場を指導する役割と同時に、その教育の内容や方法の研究を進める役割を担った機関であった。

こうした事業のなかで心理学関係者が担当したであろうものは次のような科目であっ

た。1年間の養成科の学科課程のなかには、共通科目として、「時数4」の「教育心理および教育実習」が置かれていて、その摘要には、教育思潮、制度、植民教育事情等および精神検査・教育測定その他実験心理に関する事項となっている。ここに見る限り、教育心理は検査・測定であり、それ以外は実験心理という認識であった。また、講師の指導の下に研究する選択科目のなかにも「時数5」の「教育および心理」という科目が設定されている。さらに1918（大正7）年度には教育事業一般の科学的調査および研究、教科書および教授参考書の編纂などの事業が加わり、これを担当するものを教育調査部と称した。そこでの業務として、

- (1) 満蒙、民国およびシベリアにおける邦人および外人子弟に適切な学校教育制度、施設およびその他の系統の調査
- (2) 満洲における各種学校に適切な各科教材および郷土誌料の調査
- (3) 教育教授の心理学的基礎および教師における各種能率の調査研究
- (4) 満洲に於ける児童身体発育の調査
- (5) 植民地に於ける社会教化の機宜に適した施設の調査

があり、(3)の心理学的研究の内容としては、

- イ 邦人児童と民国人児童との心的比較
- ロ 気候風土の変化と児童精神発育状態との関係
- ハ 気候風土の変化と精神的疲労との関係
- ニ 植民地に於ける社会的環境と児童精神状態との関係
- ホ 各科教授並びに学習の心理学的基礎
- ヘ 教師採用並びに分配の科学的基礎、等

が挙げられている¹¹⁾。そこで求められたのは、主として植民地における日本児童の教育のために必要な心理学的情報の提供であり、それはまた能率という観点からの調査研究であった。

初期に見いだせる実際の活動は、児童の個人差に基づいた教育実施が必要との見地から、1923（大正11）年8月久保良英を招いて「精神検査」の指導を受け、満鉄初等教育研究会第一部に知能測定委員会を設けたことである。そしてビネー（Binet, A.）の智能テストを日本児童に即して翻案した久保式団体知能検査法A式・B式を改定して、満鉄沿線の小学校尋常3年生以上の児童に実施し、その整理委員会を作って70ページの報告書を出したりしている（1924年満鉄学務課発行）。

満鉄教育研究所専任の心理学関係者としては、在籍した年代の早い順に福富一郎、朝日直樹、石川七五三二の名をあげることができる。福富一郎は、1920（大正9）年現在、研究所に所属していたが、ほどなく京城師範学校教諭として朝鮮に転出する。そして再び「満洲」に戻ってきた1939（昭和14）年には中央師道訓練所長としてであり、同年建国大学教授となっている。朝日直樹は1925（大正14）年8月満洲教育専門学校教授として渡満し、1929（昭和4）年4月30日から1934（昭和9）年10月31日まで研究所講師を兼任しているが、その後は奉天鉄路総局人事課に移籍する。石川七五三二は1934（昭和9）年8月13日から教育研究所講師となり、1937（昭和12）年12月同研究所が閉所されると奉天朝日高等女学校教諭となるが、間もなく帰国して、1944（昭和19）年には東京文理科大

学研究科を終了し、同大学心理学研究室副手兼教育相談部員となっている。したがって、石川は研究所の晩年にあたり、3年あまりの期間でしかなかったが、注目すべき仕事を残しているし、そのアイデンティティからしても、満鉄教育研究所の心理学者について語るなら石川ということになるだろう。福富は建国大学のところで、朝日は満洲教育専門学校のところでとりあげることにする。

石川七五三二は1899（明治30）年10月20日、青森県に生まれ、1925（大正15）年東京高等師範学校の専攻科を卒業した。その際の卒業論文は「性格の心理学的研究」であった。1928（昭和3）年、愛知県立児童研究所の技師となり、1932（昭和7）年現在名古屋教育研究所長を務め、そして、1934（昭和9）年8月13日から教育研究所講師となったわけである。先にも述べたように敗戦を待たずに日本にもどり、東京文理大を終了後、1945（昭和20）年には東京女子美術専門学校教授に、1950（昭和25）年、山梨大学教授に就任する。この間、1949（昭和24）年には新教育研究所を主宰している。1973（昭和48）年3月逝去、享年73歳であった。児童心理学および心理検査法を専門とし、日本応用心理学会の名誉会員になっている。

教育研究所在任時石川は、精力的に満鉄教育研究所の実験学校や満鉄附属地の小学校児童を対象にテスト調査し、その結果と日本在住児童の同テストの結果とを、また渡満期年令別の比較研究をしている。それらを下記のように、研究所の研究要報に報告している。これらは「満洲」にあったからこそ実行できた調査研究といえよう。

「興味型より観たる在満日本児童の個性的特色」研究要報第6輯 1935年

「在満日本児童の智能的特質（第一報）」研究要報第8輯 1936年

「在満日本児童の情意的特質（第一報）」研究要報第9輯 1936年

「在満日本児童の智能的特質（第二報）」研究要報第11輯 1937年

「在満日本児童の情意的特質（第二報）」研究要報第12輯 1937年

「情意テストの結果より観たる在満日本児童の個性的特色」応用心理研究第4巻第2号
1936年 pp.44-48

満鉄附属地の学校には中国人、朝鮮人等の児童もいたのであるが、日本の児童のみを対象とした調査である点は注意をひく。

また、同教育研究所は「教育的経験の動静即ち教育活動の實際を展望し、その研究企画を相互に交換し、連絡協調を緊密ならしむる」¹²⁾ ために、月刊『満鉄教育たより』を発刊した。それは1934（昭和9）年9月30日発行の創刊号から満鉄附属地の教育行政権の移譲によって、1937（昭和12）年12月15日の第39号までで終刊となる。同研究所の研究機能は従来、組織的なものであるというよりむしろ所員の個人的な研究に頼っている傾向があり、満洲教育専門学校の附属研究所であった時点までは、その挙げられた業務課題にもかかわらず、活発に活動を展開するまでにはいたらなかったようである。しかし1933（昭和8）年満鉄独自の教育を追求する機関として再出発するにあたって、研究所の機関誌として『満鉄教育たより』が発行されるようになったのである。石川はちょうどこのような時期に赴任し、その創刊号から1935（昭和10）年5月発行の第9号までの編輯の任にあっている。研究所に入所してただちにとりかかった仕事であり、同誌の性格の路線を敷いた。教員の教育や教育研究会・研究活動の報告、「満洲」や日本、欧米の教育事情の

報告、教科や教育に関する論文など、さまざまな問題が論じられている。石川自身も、初等教育研究会で行った「心理学上よりの学級組織」という講話（1934年8月24日）、「我が国心理学研究の一展望」と題して日本心理学会第5回大会の動向（第10号1935年6月）、『心理学』（丸山良二著、藤井書店）の新刊紹介（第11号1935年7月）、「蒙古の旅に謎の民を偲ぶ」（第17号1936年1月）、「日本応用心理学会展望」（第22号1936年6月）などを同誌に執筆しており、その活発な活動をたどることができる。さらに、奉天教育会主催で、当時東京文理科大学教授の田中寛一を招いて「現代教育の趨勢」という講演を1935（昭和10）年5月15日に奉天春日小学校講堂において行っているが、田中の招聘に石川が力をつくしたと考えられる。それらに加え、意欲的に上記の研究を行っていることを考えあわせると、教育研究所の最終期においてではあったが石川の力は大きいものがあったと思われる。

5. 満洲教育専門学校と朝日直樹

満洲教育専門学校は、満鉄教育研究所の沿革で触れたように、1924（大正13）年9月1日に開校され、1933（昭和8）内地からの教員確保が容易になったことと昭和初期の不景気によって廃校のうきめにあった。中学卒業後3年間の課程で教員資格がとれる、日本最初の専門学校令による初等教員養成専門の機関であったが、わずか9年間存在しただけだった。その間に世に送り出した卒業生は231名にすぎなかった。しかしきわめてユニークな教員養成校だったといわれている。卒業生であった四方幸三氏は「満鉄は金をかけて、人数はたった40人しか募集しない、3年間ぜいたくな生活させて、勉強させてくれた。師範学校といえどかく陰気くさく、かたくりしい学校です。ここはすごく明るくブライト・フェロウというのですか、実に明るい、学生が生き生きして、私は驚異でした。」¹³⁾ と言う。当時教員養成の師範学校は授業料は国庫負担で、全員寮生活、多少の小遣い金も支給された。この専門学校もその点は同様であった。卒業生にこのようにいわせるこの学校はどんな学校だったのであろうか、そしてなぜこのような学校がつけられたのであろうか。

「第一次大戦後の好況のなかで、満鉄がそれまで各府県に推薦を依頼して採用していた教員の志願者が減少し需要を満たさなくなったので、自ら教員養成に着手することとしたとき、当時の学務課長保々隆^{たかし}が、師範型教師からの脱却を標榜して関係当局を説得し、苦心して発足させた」のがこの教育専門学校である。「したがって戦前において唯一の国家権力によらない教員養成校であったし、その内容も自由主義的色彩が強かった」¹⁴⁾ という。その保々が1927（昭和2）年11月16日、満鉄地方部長本務と同時に初代の校長を兼務して、1929（昭和4）年保々に代わって前並中尾が校長になるまでの2年間という短い期間であったが、彼自身の理想の実現へむけてその基礎を築いた。1929年3月の本校の学校要覧によると、文科一部、二部、理科一部、二部の1年から3年までの全在籍学生116名に対して、教員は校長以下教授14名、助教授2名、講師4名、兼任講師4名、舎監（兼任）・配属将校・校医（兼任）各1名、助手2名があたっていた。附属小学校は尋常科6学年及び高等科1学年、補助学級、複式学級を擁していた（在籍児童438人）。

そこでの朝日直樹について述べておこう。彼は1988（明治21）年2月1日石川県に生まれ、1916（大正5）年「想像について」と題する論文を書いて京都帝国大学の心理を卒

業した心理学者で、大阪児童相談所、梅花女子専門学校を経て、1925（大正14）年、開設されて2年目の満洲教育専門学校教授として赴任する。ここでは、心理・哲学を担当している。日本国内からの教師確保が容易になってきて、教員養成というこの学校の任務がほぼ終わる頃、1931（昭和6）年から1933（昭和8）年にかけてアメリカ、ドイツに留学した。帰国後、ちょうど同校が閉校となったことで、4月にはそれまで講師を兼務してきた満鉄教育研究所に移るが、同年7月には奉天鉄路総局と兼務し、奉天青年学校にも教諭として関係する。翌1934（昭和9）年には教育研究所を辞して鉄路総局人事課に参事として勤務することになる。満鉄職員の採用および配置のための適性検査に従事した。「総局本務となってからは鉄道の画期的拡張時代であったから、採用につぐ採用で、私の関係した採用が、満人5,000名、日人1,700名、従って試験をしたのが55,000名以上に上り、且つ採用に当たって現実に可能なだけ適性検査を適用した。当時日曜日でも本当に休みとなったのは平均二カ月に一度もあったろうか」¹⁵⁾と生き生きと語っている。1938（昭和13）年には奉天鉄路学院に転じ副院長となった。37歳から57歳までの20年間、働き盛りを満鉄関係機関ですごしたことになるが、教育関係の仕事より鉄道関係の仕事の方にやり甲斐を見いだしていたようである¹⁶⁾。特色ある学校も、卒業生たちの感想にもかかわらず、朝日にとっては、鉄道の仕事にかなうものではなかったらしい。しかし、彼の心理学的研究業績を挙げておくことも意味がある。この時期を中心としてその主なものをあげておく。

「気付かざる感覚と判断錯誤」『心理研究』第52号 1916年 pp.417-424

「想像に就いての研究(1)～(3)」『学校教育』第39号～44号 1917年（卒業論文をまとめたもの）

「形態心理学に就いて」『南満教育』第59号 1926年

「ペスタロッチに於ける直観に就いての考察」『南満教育』第70号 1927年

翻訳書・ウッドウォース『行動主義心理学』中文館 1927年

「中日児童の智能の比較」『満洲教育専門学校研究報告』第1輯 1927年

「日支児童の意志気質の比較」『満洲教育専門学校研究報告』第1輯 1927年

「日支児童及青年の心理学的研究」『満洲教育専門学校研究報告』第8輯 1929年

「日支児童の心理学的研究」『日本心理学会第二回大会報告 心理学論文集Ⅱ』1929年 岩波書店 pp.176-183

『満洲教育専門学校研究報告』にみられる日本と中国の児童・青年を対象とした知能や意志気質のテスト調査研究がここでは注目に値する。朝日としてはそれまで、「満洲」とは何ら関係のない研究論文を発表していたのが、ここではじめて任地に即した研究をしている。これ以前にも、知能検査やたとえば計算能力テストなどを学校現場の教師が実施したことはあったが、在住心理学者が実施したこの種の調査はほとんどはじめてといっている。これについては後の機会にとりあげたい。

6. 満洲医科大学と黒田源次たち

満鉄は関東都督の認可を受け、1911（明治44）年6月南満医学堂の事務を奉天附属地大連医院奉天分院内に開始した。同年8月に南満医学堂は専門学校令による専門学校と定められ、10月には本科生日本人および予科生中国人の入学者に授業が始まった。これが後の

満洲医科大学のもとになる。1922（大正 11）年 5 月、満洲医科大学の設立が認可され、同時に予科・別科・南満医学堂を併置していた。予科は日本語授業についていけない中国人学生のための日本語等の授業を授けるためのコースであったが、その後学部進学課程の機能をあわせもつようになった。修了後本科に進学するかたちがとられていた。1924（大正 13）年には大学予科附属予備科に中国人女子の入学を認めるようになり、同年南満医学堂生徒の募集を停止する。別科はのち専門部と改称し、中国人生徒を入学させた。それとは別に薬学専門部もおかれた。中国人女子が行かれるのはこの専門部までだった。学部卒業生にはさらに大学院専修科、および研究科にすすむ道がひらけていた。他に満洲医科大学医院看護婦養成所も附属していた。

教室は、解剖学、生理学、医化学、病理学、薬物学、微生物学、衛生学、法医学、内科学、外科学、小児科学、精神病学、眼科学、産婦人科学、耳鼻咽喉科学、皮膚泌尿器科学、歯科、理学療法科、東亜医学研究所、栄養科、と分かれ、他に予科、専門部、薬学専門部等をもち、200 人を優に越す教職員を擁していた。

1939（昭和 13）年 8 月の『満洲医科大学一覽』¹⁷⁾によれば、そのなかで、黒田源次は生理学教室の筆頭教授であると同時に東亜医学研究所長を、さらに専門部教授も兼ねている。長谷川和美は予科教授として、心理学とドイツ語および修身を担当し、専門部講師も兼任している。また、のちに満洲心理学会会員に名を連ねる大林恵美四郎が薬学士として 1925（大正 14）年 3 月 10 日から 1928（昭和 3）年 4 月 1 日まで予科助教授に在職していたことを、旧職員名簿のなかに拾うことができる。

他に京都帝大の心理を 1936（昭和 11）年に卒業した阿部孫四郎が、九大大学院を退学して 1939（昭和 12）年から 2 年ほど満洲医大の生理学教室、つまり黒田の下で助手をしていた。その後、武内睦哉が在籍している。

大林恵美四郎についてであるが、1893（明治 26）年 3 月熊本県天草に生まれ、1921（大正 10）年広島高等師範学校教育科を卒業し、呉高等女学校に勤めた後、1925（大正 14）年満鉄に入社している。大学一覽にあったように薬学士をいつ取得したのか、あるいは何かのまちがいか定かでない。満洲医大を辞めてから、撫順高女教諭、安東大和尋常小学校長、安東青年訓練所主事、哈爾浜尋常高等小学校長、哈爾浜桃山尋常小学校長を歴任し、1939（昭和 14）年 5 月から牡丹江青年学校長を務めている。また、『南満教育』（第 52 号～第 62 号、1926）に「学校体育の目標並びに取扱上の研究（1）～（3）」などを書いている。経歴等から推察すると薬学士という方が何かの誤りではないかと思われる。

1908（明治 41）年 2 月に鳥取県に生まれた長谷川和美は、1931（昭和 6）年京都帝大哲学科を卒業し、同大学院にて研究を重ねた後、1933（昭和 8）年には東亜伝導協会京都駐在所に勤務することでキリスト者として出発する。満洲医大予科教授として赴任するのは 1936（昭和 11）年 4 月であった。そこでどのような活動をしたか詳らかではない。わずかに志学会の発起人に名を連ねていることと、「道德性に於ける東洋的と西洋的」（『満鉄教育たより』第 33 号 1937 年 5 月 15 日 pp.1-5）という論文にうかがい知ることができる。志学会とは、精神文化（倫理、宗教、哲学、教育、史学、文芸）の研究による人格の修養を目的として同志を募り 1926（昭和 11）年 8 月に発会したもので、満洲医大、奉天一中、奉天朝日高女、奉天図書館、教育研究所などから 1、2 人の有志が発起人になった研究座

談会的のものである。発起人のなかには他に満鉄教育研究所の石川七五三二も含まれており、石川の「在満児童の心理的特色素描」の報告や黒田源次の「輯安の壁画」の講演、「長谷川の「東西道德性の相違について」の講演、国立博物館で開催中の東洋古地図展覧会を黒田の説明で参観するなどの活動が行われている。

黒田源次については少し詳しく触れておくべきだろう。彼は1886（明治19）年12月4日熊本県有馬家に生まれ、後に黒田家の養子になったことで改姓している。1911（明治44）年京都帝国大学文学部哲学科心理学専攻を卒業した。卒業論文は「表出法の実験批判」であった。卒業とともに同大学院に「聯合と統覚」という課題をもって進学し、医学部の石川日出鶴丸教授の指導のもとに生理学教室に籍を置いた。ヴントから出発して、当時日本ではまだ取りあげる人のほとんどなかった条件反射法にとりくむことになる。1914（大正3）年京都大学医学部副手に、1920（大正9）年には同医学部講師になっている。この間1919（大正8）年から2級上の千葉胤成、浦本政三郎とともに『心理学雑誌』（京大刊）を創刊、編集を担当する。1922（大正11）年には「視野闘争の研究」で文学博士号をとって、1924（大正13）年から1年間文部省の留学生としてドイツにわたり、日独文化協会 *Japanisches Institut* 初代所長としてベルリンに駐在した。1926（大正15）年5月、満洲医科大学教授として奉天に赴任し、生理学第一講座を担当することになる。1929（昭和4）年彼は満洲医大に東亜医学研究室を創設する。1931（昭和6）年から翌年にかけて再びヨーロッパに留学。1939（昭和14）年以降同大図書館長、医学陳列館長、予科主事、東亜医学研究所長、同大評議員を歴任する。戦後1947（昭和22）年に東京国立博物館陳列品課嘱託になり、1952（昭和27）年には奈良国立博物館の初代館長兼正倉院評議員を務めている。1957（昭和32）年1月13日、骨髄炎のため逝去。享年70歳であった。

心理学者としては特に後半は異色な経歴かもしれないが、研究領域、従って研究業績は心理学はもちろん医学、古代文化、初期洋画、中国美術等にわたり、きわめて広かった。心理学関係の著書は

『条件反射論—意識生活の生理学的解釈』1924年 生田書店

『心理学の諸問題』1924年 寶文館 があり、

他に、視野闘争に関するものをはじめとして論文が多数ある。また医学関係のものもこれまた多数残している。「東亜医学研究所は漢方医学を主体とする東亜医学の研究並びに東亜に於ける医学に関する諸事情の調査研究を目的とし、大正15年黒田生理学教授主宰の下に中国医学研究室の名をもって創設され、昭和12年現在の名称に改められたものであるが、その今日までの業績の主たるものは、文献の蒐集とその整理、古医書に関する書志学（ママ）的研究、漢方医の薬方の研究、漢薬の調査並びに研究、その他等である」とされている。そこで黒田の関わったものとして、たとえば、『満洲医科大学業績集』第1輯（昭和9—13年）の「8 東亜医学」¹⁸⁾によれば、

『中国医学書目』（岡西為人と）1931年

「東亜医学の研究に就いて」満洲医学会総会（講演）1935年

『宋以前医籍考（第1輯 内経、運氣）（日名静一・岡西為人と）1936年

『宋以前医籍考（第2輯 脈経、難経）（日名静一・岡西為人と）1939年

「靈枢経に就いて」『支那学』第7巻 第4号 1934年

「医薬としての丹」(英文)『石川教育還暦記念論文集』1938年
 「丹薬」『東亜医学研究』第2輯 1939年
 「蒙古薬方」『東亜医学研究』第2輯 1939年
 「シイボルト先生の元治元年日記」『シイボルト記念講演集』1935年
 「シイボルト先生とその門人」『長崎談叢』第17輯 1935年
 「仏典に現れたる医薬」『国民医学』第15巻 第11号 1938年
 などが列挙されている。

また、『西洋画の影響を受けたる日本画』(1928年),『上方絵一覽』(1929年),『長崎系洋画』(1932年)などの美術関係のものも多数ある。さらに阿部孫四郎¹⁹⁾によると,奈良心理学会で部分的に紹介された「気の研究」は未完ながら中国文化心理学として貴重なものであったようである。

きわめて博学多才である。文化についても幅広く深い造詣をもつこのような人物が,立ち会ったであろう当時の満洲医大やそれらを取りまく民族問題の現実から,人として何を感じていたか切に知りたいところであるが,それを拾うことはむずかしい。

奉天第一中学の3年生であった野村章は1940年秋,兄の在学する満洲医科大学恒例の大学祭を見物に行き,開放されていた標本室を見てまわって,膨大な量の人体標本に慄然としたことを書いている。

「そこにはありとあらゆる人体の部分から完全な焼死体までが陳列されていました。全部見終わるまで半日かかるほどでした。ホルマリン漬けの頭部標本の右半分には生前の顔が残っていました。ある室では胴体が厚さ10センチほどの輪切りにされ,それを立てて上から順に断面が観察できるように並べてありました。標本にされた人びとに親も兄弟もあったことでしょう。しかしここは人間が物体としてしか扱われていない不気味な世界でしかありません。恐ろしい体験でした」²⁰⁾。野村も,戦後に国際法違反の残虐な人体実験をやっていた「七三一部隊」が奉天から北北東約500キロのハルビン郊外にあり,満洲医大教授北野政次が数年間その部隊長をしていたことを思っている。その北野は微生物学教室の筆頭教授であり,専門部教授として黒田と名を連ねている。

7. その他の機関と人たち

(1) 南満洲工業専門学校と綾哲一

満鉄が高等教育の学校として満洲医大とならんで大事にしていた南満洲工業専門学校には,綾哲一が1932(昭和7)年から1934(昭和9)年まで教授の任にあった。彼は1897(明治30)年11月28日香川県に生まれ,師範学校卒業後,小学校に勤務しながら文検に合格し,上京して英語学校に学んでいる。さらに広島文理大学心理に学び,卒業と同時に渡満している。1934年には宮崎師範学校教諭として日本に戻り,大分県高鍋高女校長,小林高女校長,宮崎県立延岡高女校長などを経て,戦後は宮崎県立都城泉丘高校長から宮崎大学学芸学部教授になっている。1963(昭和38)年同大学定年退職後は宮崎女子短期大学学長に転じ,1977(昭和52)年3月11日逝去。享年69歳であった。在満中の研究業績としては,調査を実施した「満州国」児童の在籍する大連市某公学堂の日本語教師であった古市賢三郎との共著で,

「日満児童の列国観」(1934 『応用心理研究』第3巻第1号 pp.93-116)を残している。

(2) 満鉄大連図書館と柿沼 ^{かたし} 介

満鉄にとっての図書館の位置については先にふれたが、その図書館はそもそも満鉄設立の翌1907年10月に大連本社の一室で開始されたものだった。社会事業のひとつとして1910年に図書館事業を独立させ、沿線附屬地に次々に設置していき、1934年にはその数23館、分館6までにのぼった。1918年1月の調査部の機構改革以降大きく発展してきた。柿沼が渡満するのはこの時期であった。

柿沼介は1884(明治17)年に生まれ、1911(明治44)年に東京帝国大学心理を「気質の研究」と題する論文を書いて卒業する。東京市立日比谷図書館に勤務していたが、前述したとおり満鉄図書館の拡充整備をはかっていた島村孝三郎に請われて1919(大正8)年に満鉄大連図書館に入社。1926(昭和元)年大連図書館長になり、以来1940(昭和15)年5月に満鉄を退職するまでずっとその任にあった。同年6月には満洲国国立中央図書館壽備処嘱託となって洋書の収集にあたり、1943(昭和43)年再び満鉄大連図書館顧問に復帰、敗戦後、大連図書館が中国長春鉄路公司に接收され、科学研究所中央図書館と改称されると同館の館長を1948年まで勤めた。引き継ぎのための目録作成と事後処理のためであったという。帰国後は国立国会図書館で議事録索引の基礎をつくり、1960年から1971年まで、上海にあった東亜同文書院大学のながれをくむ愛知大学教授として教鞭をとった。1971(昭和46)年、87歳で逝去している。そのほとんどを図書館畑を歩いてきた柿沼は「資料以外に興味がない」人といわれ、戦後もずっと「自らが植民地の図書館を担ったという反省はな」く「諦念かそれとも無邪気なのか」と評されている²¹⁾。

たしかに図書にしか関心がなく、その論文もほとんどが文献解題と収集した資料の紹介、書評、それに図書館の紹介に終始している。他方、柿沼は満鉄図書館が作成した総合目録が関東軍の作戦に貢献したという理由で叙勲者のなかに加えられたが辞退するという行動に出たり、一高時代の後輩が図書館の本を利用して『満洲事変』という本を書き、柿沼にその序文を依頼してきた時、彼は「軍のお先棒を担ぐ本の序文はお断りする」と拒絶したというエピソードが残っている。綾川武治が大川周明らと共に右翼運動に邁進したのに比べ、あの時代のかなり「良心的な」部類だったともいえよう。しかし時代はそんな「良心」を斟酌しはしない。たとえば1932年「満洲国」は各地の文化機関に「現存の各書籍中、満洲国の国情にあわないものは凡て焼き棄てる」という通告を出し、3月から7月末までのあいだに650万点余の書物を焼き、これに少しでも異議を唱える者には弾圧を加えたという。そのような現実を知らないですませられたはずはない。それにもかかわらず、戦後もその時代とそれへの自分の思いに一切ふれることはなく、大連図書館長時代と全く変わらず「本の虫」の生涯を送った。

柿沼は心理学畑を歩いたのでこそなかったが、その姿勢はむしろ比較的多くの心理学者たちに通じるある種の典型を示しているように思われる。都合の悪い状況とできる限りかわることを避け、そのためにむしろ「研究」のなかに没頭していくというスタンスである。特に心理学という抽象性をもった分野であることがそれを許していたことは容易に想像される。

おわりに

ここでは、心理学関係者が渡満し始めた前半期に焦点をあてて、関係者を洗い出すこととその所属機関の性格と人物の経歴を中心に調べてきた。まず心理学関係者たちはそのほとんどが教育関係の機関に所属し、高等ないしは中等教育および研究に従事した。所属機関とその広がりには「満洲」社会の植民地化の変化を反映して変遷してきた。1925年つまり昭和になる以前は、どちらかという理論的な、そして「満洲」としての特徴をとくにもつことのない研究が多かったが、昭和に入ってから「満洲」に在住している子どもたちを対象としての調査研究がなされてきていた。それは智能検査を中心として、性格検査や意識調査も含まれていた。これらの研究についての詳しい分析は今後の検討事項であると同時に、また後半期、特に建国大学の心理学者たちとその人たちによって結成された満洲心理学会を中心とした動向についての検討も今後の課題としたい。

註

- 1) 野村 章 「序にかえて『満洲・満洲国』教育史研究に携わってきて」野村章先生遺稿集編集委員会編『「満洲・満洲国」教育史研究序説』1995 エムティ出版 p.16
初出：『季刊 教育法』第86号 1991年秋号
- 2) 小林英夫 『満鉄―「知の集団」の誕生と死』1996 吉川弘文館 p.17
- 3) 勝部は「日本におけるファシズムの進展が、(Ⅰ)準備期、大正デモクラシー運動の展開→民間右翼の赤化防止運動。(Ⅱ)成熟期、(1)1929―32年の危機→満洲事件→五・一五事件、(2)1936・37年の危機→二・二六事件→日中戦争。(Ⅲ)完成期、1939―40年の危機→近衛新体制→東条独裁→太平洋戦争、という三つの時期を通して発展する。」としている。(勝部元「天皇制ファシズム論」岩波講座『日本歴史21 現代〔4〕』1963 p.118)
- 4) 「会員名簿」満洲心理学会『第一回全体研究発表会報告』康德9(1942)年10月を中心に、1932年「日本心理学会会員名簿」、1935年度『応用心理学会 日本心理学者名簿』、『満洲人名辞典』(日本図書センター、1989)(中西利八編 満蒙資料協会蔵版『満洲紳士録 第三版』1940年の復刻)、各種学会誌などによって補充した。
- 5) 小林英夫 前出 p.70
- 6) 福富一郎 「満鉄の教育施設」1920『学校教育』第7巻4冊(通巻81号) pp.61-64
- 7) 槻木瑞生 『『満鉄教育たより』解説』「満洲国」教育史研究会監修『「満洲国」教育資料集成Ⅱ 期 満鉄教育たより3 昭和12年1月―11月最終号』1992 エムティ出版 p.6 参照
- 8) 畑中幸之輔は1988(明治21)年6月福井県に生まれ、1920(大正9)年京都帝国大学哲学科教育学専攻を卒業している。富山県栃波中学校教諭、倉敷紡績教化係および重役秘書、日本絹布宿泊係を経て、山梨中学、芳蘭女学校各教諭を歴任し、1923(大正12)年10月満鉄に入社した。翌1924(大正13)年6月20日から教育研究所に移るが、同年9月満洲教育専門学校が設立されると同時に、教育・倫理・論理を担当する教授に就任し、くわえてその附属小学校長をも兼務することになる。同専門学校が廃校になった1933年から1年間教育研究所の所長をつとめている。その後安東高等女学校長等を歴任し、1936(昭和11)年撫順中学校長になる。1937年12月教育行政改正により満鉄退社後も、引き続き撫順中学に在職している。少なくとも一時期、心理診断法の投影法を中心とした研究手法に関心をもつ、心理学的志向性のある教育学者だったと考えられる。
- 9) 秋山真造は1984(明治17)年4月に生まれ、1910(明治43)年東京高等師範学校を、また1919(大正8)年京都帝国大学教育学科を卒業し、山梨県師範学校、東京府第二高等女学校教諭を経て、満鉄教育研究所講師、「満洲国」地方部学務科視学を歴任。欧米留学後、1937(昭和12)年には在満学校組合聯合会主事、在満日本教育会北部会長を務めた。
- 10) 槻木瑞生「解説」『「満洲国」教育史研究会監修『「満洲・満洲国」教育資料集成 Ⅱ』1993 エムティ出版 p.4
- 11) 福富一郎 同上 pp.63-64

- 12) 八木壽治 (教育研究所長) 「発刊に臨みて」『満鉄 教育たより』創刊号 1934 (昭和9) 年9月13日 p.1 「満鉄教育たより」第1巻 「満洲国」教育史研究会監修 「『満洲国』教育資料集成Ⅱ期」1992 エムティ出版
- 13) 岡野 正 「参考資料『四方幸三氏に聞く』」野村章先生遺稿集編纂委員会編 「『満洲・満洲国』教育史研究序説」1995 エムティ出版 p.111
四方幸三は満洲教育専門学校第三期生。京都師範学校を1926年卒業と同時に同校に入学した。同期の入学者は、志願者626名中43名であった。毎年、同様の競争率であった。
- 14) 野村 章 「『満洲』における『新興教育』読者」野村章先生遺稿集編纂委員会編 「『満洲・満洲国』教育史研究序説」1995 エムティ出版 p.106
初出:『季刊 教育運動研究』第6号 1977
- 15) 朝日直樹 「鉄道やの仕事と教育家の仕事—特別寄稿—」『満鉄教育たより』第16号 1935 (昭和10) 年12月15日 p.1
- 16) 朝日直樹 「(鉄道やの……筆者) 仕事は実に面白かった。私の過去を通じて恐らくこれほど面白かったことはなかった。将来に於いてもそう度々あらうとは思われない」として、その理由を教育界と比較して述べている。同上 p.1-2
- 17) 『満洲医科大学一覽 (昭和13年8月)』「満洲国」教育史研究会監修 「『満洲国』教育資料集成Ⅲ期第8巻 学校要覧類Ⅱ」1993 エムティ出版
- 18) 筆者は1999年秋中国東北部を訪れる機会があり、瀋陽 (旧奉天) の中国医科大学 (旧満洲医科大学) を訪問した。当時のまま残されている図書館や講堂、“1929”と建築落成時の年がモザイクにうちこまれた本部事務所入り口等を見てまわった。その際に図書館の司書の方が探しだして下さったのが、『満洲医科大学業績集』であった。短い時間しかとれなかったが、その際に親切に案内をしてくださった国際交流処の李勝軍先生や司書の方々ならびにいとわず通訳と旅行案内の労をとってくださった天津師範大学の郝蕊先生に、この場をお借りしてお礼を述べたい。
- 19) 阿部孫四郎 「故黒田源次博士追悼記」『心理学研究』第28巻 第1号 1957 p.57
- 20) 野村 章 「植民地そだちの少国民」『岩波ブックレット No.186』1991
野村章先生遺稿集編纂委員会編 「『満洲・満洲国』教育史研究序説」1995 エムティ出版に再録 p.146-147
- 21) 東條文規 「図書館人の戦争責任意識—『満洲』に渡った三人の場合—」ず・ぼん編集委員会編 「図書館とメディアの本 ず・ぼん③」1996 ポット出版 pp.20-31

Psychology in “Manchuria”

by Kuniko Koyano

To date, there has no psychological studies of the Japanese colony of “Manchuria”. In this paper, I have intended to discuss the work of Japanese psychologists during that time. 1919 to 1935 is the approximate focal time period of this study.

Most of the psychologists in “Manchuria” during that time worked in colleges, professional schools, high schools and government offices of education. These institutions were changed during colonization. Psychologists of that time concentrated on the intellectual and mental faculties of Japanese, Chinese, Korean children since 1926 (the beginning of the Showa Period).

I give special mention to such psychologists of the time as Mr. Shimeji Ishikawa of The Mantetsu Educational Research Institute, Professor Naoki Asahi of The Professinal School of Education, Dr. Genji Kuroba of The Manchurian Medical College.

An analysis of subsequent psychological studies (1936-1945) will be treated in a later paper.